

演題 7

Partial pulpotomy の歯髓に及ぼす影響
に関する実験病理学的研究 (II)

○清水裕之・梅山 望・細矢由美子・後藤譲治
(長大・歯・小児歯)

演題 8

乳歯および永久歯の萌出時期に関する研究
—相関関係から見た萌出時期の
類似性について—

○濱野良彦・山口昭一* Urban Hägg
(九大・歯・小児歯) *(ルンド大・歯・矯正)

1978年 CVek, M. 等は、外傷による歯冠部破切歯に対して、冠部歯髓の全てを除去せずに、冠部歯髓の一部のみを除去し、残りの歯髓を保存する部分的生活歯髓切断法 (Partial pulpotomy) の術式及び臨床成績を発表している。その後、部分的歯髓切断法に関する報告は、臨床的報告及びX線的報告が大部分で、本法に関する病理組織学的研究は極めて少ない。演者等は、外傷による露髓を伴う歯冠部破切歯に対して、部分的生活歯髓切断法の術式を施した場合の歯髓の状態について病理組織学的に解明する目的で、成犬の歯牙を用いて実験を行った。

Nembutalの静脈内注射によって麻酔を施した成犬の前歯に対して、ニッパーを用いて歯冠の一部を破折させ僅かに歯髓を露出させた。約1時間そのまま放置した後、ラバーダム防温を施し、滅菌したラウンドバーを装着した電気エンジンを用いて約2mmの深さで部分的に生活歯髓切断を行った。切断面を0.02%アクリノール液で洗浄後、滅菌綿球を用いて傷面の止血と乾燥を行った。次いで水酸化カルシウム製剤 (改良型カルビタール・ネオ製薬製) を切断面に貼布し、燐酸亜鉛セメントで裏装し、コンポジットレジンを用いて窩洞を充填したものを実験群Aとした。また同様にニッパーを用いて歯冠を破折させ歯髓を露出させた後、7日間放置した歯牙に対して同様の部分的生活歯髓切断の術式を施したもの実験群Bとした。また、ニッパーによって歯冠部を破折させ歯髓を露出させたまま放置したものをコントロール群とした。そして術後14日及び30日及び60日経過後、実験動物を屠殺した。被験歯は、通法に従って固定、脱灰後、ツエロイジンに包埋し、連続切片標本としてヘマトキシリソ・エオジン複染色を施し鏡検した。その結果、若干の興味ある知見を得たので報告する。

スウェーデン人小児212名 (男児: 122名、女児: 92名) の生後から18歳に至るまでの経年的資料を用い、乳歯間、永久歯間および乳歯一永久歯間に見られる萌出時期の相関性について報告する。

資料は、生後1, 3, 6, 9, 12, 18, 24カ月、その後1年に1回の割合で18歳まで行なわれた調査記録を用いた。調査方法は、視診にて行ない、萌出判定基準は、歯冠の一部分が口腔内に出現している場合を萌出歯として記録した。

第25回日本小児歯科学会において、歯の萌出時期の相関性について、グラフを用い男女間に見られる類似性を報告した。その結果、相関係数で表わされたグラフの重なり程度を比較することで、乳歯列内および永久歯列内での各々の萌出時期の相関関係において、男女間に類似性を認めた。しかし、乳歯とその後継永久歯との間には、前述のような類似性は見られず、異なるパターンを示した。この結果は、グラフの重なり程度を判定するといった抽象的な表現を用いた。そこで今回演者らは、前回報告した結果を基にこの類似性について詳細な検討を加えた。すなわち各々求められた相関係数を単独に比較するだけでなく、種々の多変量解析を行なった結果、萌出時期の相関関係に見られる男女間あるいは上下顎間の類似性につき、興味ある知見を得たので報告する。